

短編小説『バラ園』

whitecaps

Copyright Issues :

この小説には冒頭部分においてアニメ映画『時をかける少女』と類似している場面があります。この小説にふくまれる細かい設定や発想の原点についてはここでは明記しません。

〔1930年代 欧州のある国で〕

「ごめんごめん、ちょっと待ってー」

「遅いぞー、てか寝てたのかよ」

フォネラが二階の窓から家の前で待っているガットに声を掛けると、ガットは口に手を当てて声を張り上げて返してきた。今日もさわやかな晴れ空だ。フォネラは慌

てて寝床の横の服をつかんで着替えをすると、靴を手に階段を駆け下りた。

「また寝坊ね」

フォネラの母が台所で皿洗いをしている。フォネラがテーブルの上ののついていたパンを無造作に口に挟むと、パンはもう堅かった。

「お兄ちゃんまた遅刻？」

玄関から妹の音がする。靴を履いている最中だ。

「どうしてティラはそんなはやく起きられるの？」

フォネラは右手でパンを口から外して、左手でコップを持つて中に入っていたぬるいオレンジジュースを飲み干した。母親がもう用意してあった弁当をフォネラの前におく。

「どうしてそんな起きられないかのほうが不思議。」

行つてきまーす」

ガチャツと音がして妹は扉の外に消えた。

「おい、待ってくれ、待ってくれよ」

また口にパンを挟みなおしてから弁当を引つ掴んで玄関に駆け込んだフォネラは、靴を履きかけのまま妹に続

いて玄関の扉を開けた。すると外にいたガットがそれに気がついてフォネラに呼び掛ける。

「お、でてきたな。よし行こうぜ」

フォネラは近所の学校に通う中学生。ガットは友達で、同じ中学2年。もちろん同じ学校に通っているし、クラスも同じ。ガットはいつも寝坊ばかりのフォネラを口ではせかしながらもじつくり待つてくれる、いい友達だ。今日のような光景もいつもの光景だ。

米国製のティー・フォードが走るいつもの通学路を歩き始めると、ガットが提案する。

「今日はいつもととは違う道を歩いてみようぜ。あの路地の裏側、俺の兄ちゃんが言ってたんだけど、夜は幽霊が出るとか言うハナシだぜ。」

ガットが歯を見せて笑う。

「ほ、ほへへ。ほふそというの苦手なだけほ」

フォネラはとにかくお化けだとか幽霊だとかの話がとても苦手なのだ。フォネラはまだパンで口をモゴモゴさせていた。

「昼間だからいいだろ？」

ガットはスタスタとその横道に入って行ってしまふ。

「あ、ほつと、ちよつと待つへよー！」

何とか手に持っていたパンを最後のひとかけらまで飲み込みきつたフォネラは、しかたなく後について路地裏にはいると、そこにはどこか古めかしい町並みが続いていた。

(やはりガットの言うとおり、夜だったら幽霊とかでそんな感じだな)

路地裏は静かで、そしてちよつと涼しい感じがする。

これからくる夏にはいいだろう、なんてフォネラは思った。そして最初は肩をすくめていたフォネラもしばらくして慣れてくると、ガットと日常の話をし始めた。

「なんかさあ、昨日うちの電話使おうとしたらさ、壊れてたんだよね。隣町に住んでるおばさんに久しぶりに

電話してみようとしたのに、ダイヤルするところが壊れててさ、回せないんだよ。」

すると、ガットが顔色も変えずに答えた。

「そうかあ。俺んこの黒電話なんか回そうとしたらな、ダイヤルが『ガチャ』つって外れて、それつきり電話機は高いーとか言つて買い換ええないんだよ、うちの親。まあ、でもちよつと昔は電話つっつたらどつかの会社にしかなかったもんだからな、なんていうんだよ、うちの親。」

「それも親が言つたんだ……」

フォネラは苦笑いした。

ガットと一緒に歩いていると、フォネラの目にある情景が入ってきた。フォネラたちと同じ年頃だろうか、銀髪の色白の少女が家の窓の扉を開けて外を眺めている。その家はこの通りの中でも特に古めかしい感じの家だった。少女の横、窓の奥にはバラの花が飾つてある。たぶん、花瓶に入っている切り花だろう。

「あれ、誰だろう」

フォネラが呟く。

「ん？ どれ」

「ほら、あの子」

フォネラは少女を指さす。

「あの子か。さあ、誰だろうな」

そして少女の様子を二人は見ていたが、ガットが腕時計の針に気がついた。

「あ、やばっ！ 急がないと遅刻するぜ」

ガットが走り出す。フォネラはそれでもしばらくその少女を見ていたが、

「おい、フォネラ、走れ！ 急がないと遅刻するぞ！」

ガットに呼ばれてついにフォネラも走り出した。

次の日も二人はその路地裏に入った。そしてやはりあの少女は遠くを眺めていた。また次の日も、少女は遠くを眺めていた。フォネラは、それ以来何かにつけその少女の姿を見かけるようになった。そして、その少女はバラの花を横に必ず遠くの方を眺めていた。しかもいつもフォネラが見ていることには気がつかない。ガットはそ

れほどではなかったが、フォネラはその少女のことが気になって、ガットに誘われなくても路地裏にはいるようになっていた。雨の日も、晴れの日も、その少女はその窓から眺めていた。

フォネラはその少女に何度も声を掛けてみようという気になったが、いきなり声を掛けるのも間が悪いし、距離もある。結局なかなか声は掛けられないままだった。そしてある日を境に、ぱったりと少女の姿が見えなくなった。どうしたのだろうと気になったが、フォネラは日常を送るうちにそのことを忘れていつていた。

くくく

ある日フォネラが久しぶりにあの少女の家の前を通ると、年配のおばさんが庭のバラに水をやっている。バラの花は水を浴びて美しく輝いていた。フォネラが立ち止まって様子を見てみると、おばさんがフォネラに気づいていきなり笑いかけてきた。

「きれいでしょ？ 毎年、この季節になるとこの庭はいつぱいバラが咲くの」

「は、はい、きれいですね」

フォネラは急に話しかけられて少し緊張しながら答え

た。

「私のうちでは毎年部屋にバラを飾るのよ。」

おばさんの微笑む顔を見ながら、フォネラは勇気を出して聞いてみることにした。

「あの一、あの。ここに前、色の白い銀髪の女の子が住んでいませんか？」

するとおばさんはハツとした顔をした。如雨露の水がバラにかかる。

その後フォネラはおばさんにさそわれて家の居間に通され、紅茶を出された。

「ロベツト、お客さんかい？」

新聞を広げていた男が顔を出した。たぶんおばさんの夫だろう。

「うちのバラをほめてくださっただんです」

三人分の紅茶の準備を終えて、おばさんはテーブルに着くと、話し始めた。

「あの子は私たちの娘で、ベイリオンといいます―

―」

ベイリオンは、窓から外を眺めていたあの頃、医者も投げ出す免疫系の難病にかかっていた。病気のせいで外出することは愚か、家の階段を下りることも出来ず、食欲はどんどん落ちてきていた。そして暇をもてあましていたベイリオンは、一日中窓から外を眺めていた。かうじてベッドから体を起こすことは可能だったのだ。しかしある日、ベイリオンは体調を崩してついに寝床から起き上がることさえできなくなり、そのまますぐに亡くなった。遺体はフォネラがああの通りを通らなかつた雨の日に霊柩車に乗って運ばれた。

「病気さえなければ、普通の子と同じように元気に暮らしていたでしょうに……」

おばさんがすすり泣きすると夫のおじさんがおばさんの肩に手を置く。

「あの子は海に行きたいって……何度も呟いていました。病気さえ治れば、それも叶ったでしょうに……」

フォネラはベイリオンの母親のおばさんと父親のおじさんと共に、階段を上つてベイリオンが暮らしていた部屋に通された。少しかび臭いその部屋で、窓からの光だけが部屋を明るく照らしていた。ベッドはもう布団は引き払われ、マットレスだけがそのままのこつている。窓にはバラの花はなく、紙で出来た小さな何かが置いてある。フォネラはふとそれを手のひらに取り上げた。

「これは……」

「それは遠く東の日本という国でよく知られている紙で出来た鶴の人形です」

「鶴？」

鶴は透きとおるような白い紙で出来ている。

「『オリヅル』というそうです。親戚に日本に住んでた人がいて、その人が見舞いの時に持ってきてくれました。」

「オリヅル……」

するとそれを見ていたおじさんが言った。

「よかつたら持つて行ってください。」

「そんな、いきなり家に押しかけただけでも失礼なのに。これは大事なもののなのでしょう？」

フォネラはあたふたする。

「いいですよ。もうベイリーンはこの世にはいません。ベイリーンが見れないものを飾つていても、もう仕方ないんです。」

父親は顔をうつむかせた。

「是非もらつてください、そのほうがあの子も喜ぶと思います」

フォネラはベイリーンの両親を見たあと、鶴に目を落とした。ツンと立った尻尾にはどこかかわいらしきがある。そして、フォネラの頭にはそのときあるアイデアが思い浮かんでいた。

くくく

「最近つきあい悪くてごめんね」

ガットからのバーベキューパーティーの誘いを断つて、フォネラはその日海にきていた。フォネラの家では、おばさんのいる街の海岸に行くのが家族の夏の恒例行事なのだ。

「そうか、楽しんで来いよ」

買い換えた電話で話したガットは、優しい言葉で了解してくれた。

車から降りた後はしゃぐ家族を横目に、ある思いを胸にフォネラはゆつくりと海の中へ歩みを進める。そして少し行つて膝丈の深さになったところで、フォネラは手のひらで包んでいた折り鶴をそつと波間に離した。

「お兄ちゃん何してんの」

横から妹が聞いてくる

「ある人の、供養さ」

フォネラが笑みを浮かべる

「供養？」

折り鶴はユラユラ揺れながら少しずつ遠くへ離れていく。フォネラは妹と共に折り鶴が見えなくなるまで、ずっとそれを見送った。恋人が遠くの砂浜ではしゃいでいるのを横目にして、海は太陽の光を浴びて輝いていた。

「おーい！」

その時フォネラの耳にいきなりガットの声が入ってきた。

(空耳か?)

フォネラは自分の耳を疑う。

「おーい、フォネラ、俺たちも混ぜてくれー！」

声のするほうを振り向くと、太陽を後ろに堤防の上からガットがTシャツを振って呼んでいる。

「ガット……なんで!？」

フォネラは驚いた。

「バーベキューパーティーも海でやったらいいだろうなって思ってたなー！」

「一緒にやりましょー！」

ガットの仲間らしき人たちも大声で呼び掛けてくる。ガットはバーベキューパーティーをフォネラと一緒に出来るよう、この砂浜でやることに変えたのだ。そして少し間あつけにとられていたフォネラも、

「おーし、オーケー！」

堤防に向けて叫んだ。するとガットが堤防から走って降りてくる。フォネラも堤防に向けて走り出した。

そのころ、折り鶴はベイリーンの思いを抱いて、その魂を大海にこぎ出していた。

■ (2008.9.6)